

第199回 愛知学院大学モーニングセミナー

「愛知県を拠点に活動した画家 設楽 知昭」
～多様な表現で生と死、夢などを描いた現代絵画～

愛知県美術館 企画業務課長
深山 孝彰

2022年10月11日

画家 設楽 知昭

- 1955年 北海道苫小牧市に生まれる
- 1978年 愛知県立芸術大学美術学部美術科油画専攻卒業
- 1980年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了
- 1997年 愛知県立芸術大学助教授
- 2005年 愛知県立芸術大学教授
- 2021年 3月、愛知県立芸術大学を退任、名誉教授となる
- 2021年 7月27日逝去

幼少期から「息をするように絵を描いてきた」設楽は、芸大に入った頃には何でも器用に描けた一方で、四角いキャンヴァスに筆と油絵具、という当たり前前の絵のあり方に疑問を抱き始めました。そして自分＝人が物や世界を「見る」とはどういうことか、という根本から考え直そうと、様々な制作方法を試みていったのです。

設楽が1989年頃に始めた《鏡よりモノタイプ》シリーズは、まず自分が映っている鏡の表面に、指につけた絵具で自分の姿をなぞるように、あるいは消していくように描き、その絵具が乾かないうちに、石膏や紙を押し当てて写し取ります（モノタイプとは、原版から1点しか作れない版画のこと）。鏡に映る自分は左右が反転していますが、それを写し取るとまた反転して、鏡の中から見た自分になります。

1993年の《目の服》では、木綿で作った服を着て掌に絵具をつけ、目に見えた自分の体と周りの世界を服に描きました。目を中心に、自分と周りが一体化したように感じたといいます。2000年頃からは透明フィルムを枠に張り、向こうに見える物をフィルム上になぞって描きます。これは先行する他の画家の真似にならないための方法でしたが、やがて「向こうの物」として、自分と等身大でのっぺらぼうの人形を作ってポーズをとらせるようになり、物語が生じます。

この方法による2001年の8点組《ホテル・パシフィカ》では、人が死ぬと客室が7層あるホテルに行き、生前を振り返りながら一日に1層ずつ上ることを7回繰り返して明るくあの世へ旅立つ、という四十九日が描かれています。2005年の《透明壁画、人工夢》では、約1m角のフィルム43枚を組み合わせた4m×11mの壮大な画面で、現実と空想が交錯しています。

こうした実験と探求を経て、設楽は2008年頃からキャンヴァスの油彩画に回帰しましたが、増殖するモチーフや入り交じる空間など、イメージの奔流は若手作家のようでした。長年の教育活動から退き、いよいよ制作に専念というときに訪れた死が誠に惜しまれます。

愛知県美術館は、**10月29日から12月25日**まで開催するコレクション展の中で、「追悼 設楽知昭」として、24件の所蔵作品ほかによる特集展示を行います。